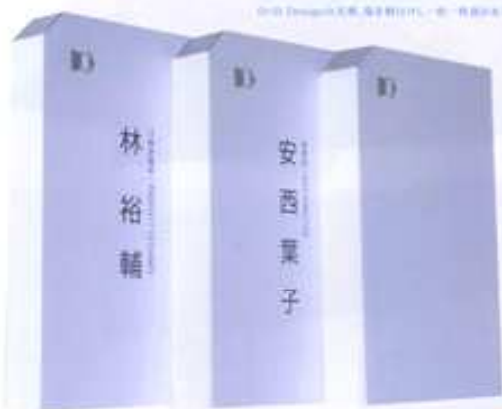


アイデアのあるデザインで、企業のアイデンティティをつくる 田中義久 (COIL inc.)

COILのグラフィックデザイナー・田中義久さんは、普段の仕事の中で加工、印刷に関して気付いたこと、あるいは新たに試みた結果をノートに記して、まとめている。そして、そこで得たものを次の仕事へ活かしているという。今回はそんな数々のトライアルの中から生まれたプロダクトデザインオフィス「Drill Design」のルール、そしてアーティスト・飯田竜太さんと取り組む実験的な作品の制作プロセスを取材した。



Drill Designの書籍、海苔印刷の1冊。一枚の紙を折って印刷した。



1枚から2枚を繋ぎ合わせると、一枚の紙が2枚分の厚さになる。これを折って印刷することで、折れ目を通して印刷された文字が透けて見えるという効果が生まれる。



Drill Designのロゴ



ドットを折ると、Drill Designのロゴになる。一枚の紙を折って印刷した。

立体とプロダクト感を平面で表現

端の部分の一部がカットされた紙の塊。これはプロダクトデザインオフィス「Drill Design」の名称のプロトタイプである。端の一点を削り付けることによって、50枚の名刺をまとめたような、端付け部には色が印刷され、1枚1枚が簡単にはがれるよう実用的な設計になっている。この名称に代表されるように、「Drill Design」のすべてのツールに、従来のような印刷のトライアルが実践されている。「デザインする時はいつも、そのクライアントにとって一番のオリジナルになることは何だろうか」と考えます。Drill Designはプロダクトデザインのオフィスで、ロゴカルなデザインが特徴的だから、すべてにおいてロゴカル重視のプロダクト感を出すことで、その会社を体現できる。そこで、C1(ポストカード)、名刺などツールをすべてに立体感が表出できるデザインを考えました。

この名称の塊、実は最初にCOILの名称として制作したもの。今回、Drill Designで制作するにあたり、より使いやすいように新たな技術を使って進化させた。「一番難しかったのは、削り付け部、色を乗せ

ると同時に削る耐久性が必要でした。最初は糊にラメを混ぜて使ってみました。安っぽく見えてしまう。次にカルマの塗料用インクに糊を混ぜてみたところ、完成形に近づきましたが、削るの強度が低すぎて削の跡が残ってしまいました。こうした試行錯誤の末、たどり着いたのが、シルクスクリーン用の印刷インクと糊を混合して印刷する方法だった。その結果、糊の光沢が出るのと同時に、割れしやすくなった。そして表面は滑りやすく特色1色で印刷。コストは通常の名称より高くなったが、Drill Designらしさが増したという評価ももらった。

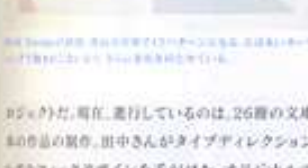
今回、立体ということが一番こだわったのが、Drill DesignのCIだ。そして、「DD」というロゴをそのまま体現しているのが、Drill Designのオフィスに飾られているポストカードである。このポストカードは、単色にロゴがあるだけのように見えるが、近くで見ると削り加工が施されている。この削り加工によって「Drill Design」のロゴになるという展開のアイデアだ。ここでの新しい試みは空押しではなく、削り加工を使っていること。いろいろな試みましたが、削り加工がコスト的にも削り加工の目的にも一番ちょうど良かった。折れ

目の幅を大きくすると立体に寄りつづ、狭くするとポストカードとして遠くから見た時に見えなくも、削りの跡を何種類か使いながら、「折れ目」の跡を印刷会社さんと相談していきまし。

立体を感じさせるもう一つのツールは、封筒である。「こういうツールは長く使うものなので、シビアなものを選んでみましたが、利便性がよく、動きのデザインならば面白くてもよいのではないかと、私な考えから生まれた封筒は、緑島みどりカードの異なる4色のパーツにしたものだった。このパーツを重ねる方式で、色の見え方が変わり、1パーツの色面構成がデザインされた封筒が生じた。これは直線と曲線の交差のデザインを一度に表現し、紙を一回に押さえて5色で印刷して一見、とがったデザインに見えるが、色の見え方によってカラフルにもできれば、直線を多く含むことができるため、TPOでの使い分けも可能だ。

文字の断片を一面に反映する試み

田中さんが仕事以外で試みているのが、多材料に作品をつくるアーティスト・飯田竜太さんと



Drill Designの書籍、海苔印刷の1冊。一枚の紙を折って印刷した。



Drill Designの書籍、海苔印刷の1冊。一枚の紙を折って印刷した。一枚の紙を折って印刷した。一枚の紙を折って印刷した。一枚の紙を折って印刷した。

が、外で、現在、進行しているのは、26巻の文庫本の制作。田中さんがタイプディレクションとグラフィックデザインを手がけた、オリジナルの文庫本を飯田さんがカットでA-Zの文字に別な、飯田さんがいつも重視しているのは、「ORATOIC」(「道徳」という言葉。通常は古本を一ページずつの断片にカットして、全頁の文字の断片が一面に反映されるという作品を制作しているのですが、その作品がロゴタイプをつくることに似ている。一つのフレーズに対してクライアントの必要としていること、伝えたいことを全部網羅して表現するのがロゴタイプであるならば、全てのページにある文字の断片を一面に反映させるという試みも面白いと思い、一緒に制作することになったのです。

ここで使われている本は一見古本に見えるが、すべてからデザインしている。制作のプロセスは、古本をスキャンして、文字だけ取り除いたものをセレクトして印刷。そこに文字を活版で重ねている。

「一冊に『汚れ』といっても、古本をスキャンして印刷すれば、表現できるかという点の個性もあり、そう単純ではありません。最初はコストも考え、特色二色で削ったら思ったような色が出ませんでした。印刷前のパーツの『汚れ』が、特色に変換する段階でかなりの部分が削れてしまい反映されなかったんです。現在の紙は質がよく、印刷適正や紙の強度も高い。紙の風合いは引き出しにくい。そこで実際に昔、文庫本に使用されていた紙を使用すべく、探してみましたが見つかりませんでした。また、現在発行されている文庫本の紙も特徴があり、使用できなかったという。試行錯誤の結果、最終的に書籍用紙に特色4色を使用することでこの問題はクリアできた。「印刷会社に依頼したら、なぜわざわざ出す必要があるんだと怒られました(笑)。熱意を込めて相談したら乗ってくれてうれしかった。このプロジェクトでは本が少しでも輝く見えたら、自身がどんなに良くても安く見えてしまう。だから削りまで抽出し、時間をかけて作り込みました。」

この作品は、2008年にキャラクターでの発表を予定している。



田中義久

1970年 東京都品川区生まれ。2000年 武蔵野美術大学卒業。グラフィックデザイナー。2002年 株式会社COILに入社。2007年 独立。2008年 株式会社Drill Designを設立。2010年 株式会社Drill Designを設立。2011年 株式会社Drill Designを設立。2012年 株式会社Drill Designを設立。2013年 株式会社Drill Designを設立。2014年 株式会社Drill Designを設立。2015年 株式会社Drill Designを設立。2016年 株式会社Drill Designを設立。2017年 株式会社Drill Designを設立。2018年 株式会社Drill Designを設立。2019年 株式会社Drill Designを設立。2020年 株式会社Drill Designを設立。2021年 株式会社Drill Designを設立。2022年 株式会社Drill Designを設立。2023年 株式会社Drill Designを設立。2024年 株式会社Drill Designを設立。2025年 株式会社Drill Designを設立。